

『和泉式部日記』成立の背景

坂本, 信道
九州大学大学院 (博士課程)

<https://doi.org/10.15017/11923>

出版情報 : 語文研究. 68, pp.1-12, 1989-12-15. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



『和泉式部日記』成立の背景

坂 本 信 道

日記とは自らの見聞にもとづく事実を記したものであり、きわめて自照的なものというのが、大方の一致した見解であろう。たしかに、現在われわれが綴る日記はそうしたたぐいのものであるし、平安時代以降の公卿の漢文日記の場合は、事実に沿った目録という点において、同様の性格を持つといえよう。しかし、女流仮名日記と呼ばれるものを、「日記」の名のもとに一括し、事実や体験に即した自照的な作品という観点からのみ論ずることは、ややもすれば片手落ちなどころがありはしないだろうか。描かれたことすべてを事実
に即していると考え、記録類と照らしあわせて一致しないことを、作者の勘違いや忘却のせいとするのは問題があるように思われる。日記の事実性・自照性ということはひとまず置いて、日記を執筆し公開するにあたって作者の用いた表現技巧についても考えてみる必要があるのでないか。たとえば自照的な女流日記の代表のごとくいわれる『蜻蛉日記』にしても、

かくありしときすぎて、世中にいとものはかなくともかくにもつかでよにふる人ありけり。(中略)人にもあらぬみのうへま
でかき日記して、めづらしきさまにもありなん、天下の人のし
なたかきやとはんためしにもせよかしとおぼゆるも、すぎに
しとしつきごろのこともおぼつかなかりければ、さてもありぬ
べきことなんおほかりける。

という上巻の書き出しの部分と、

かくとし月はつもれど思ふやうにもあらぬみをしなげけばこゑ
あらたまるもよろこばしからず。猶ものはかなきをおもへば、
あるかなきかの心ちするかげろふのにきといふべし。

という上巻末とを見れば、たんなる自己の人生の思い出の記として書かれたものでないことは容易にわかる。これは作者の弁解であり、あきらかに読者を念頭に置いたものであって、公開のためにとられた表現技巧といえよう。事実や自己の見聞のなかに、公開を意識した作者の表現技巧や設定が存在するとすれば、日記の成立においてまず第一の要因といわれている自己の人生に対する省察、いわゆる自照性の問題についても、再検討してみるべきかもしれない。

『和泉式部日記』の冒頭は、亡き為尊親王を偲んでいた和泉式部のもとへ、為尊親王に仕えていた小舎人童がやってくるところから始まる。

夢よりもはかなき世の中を嘆きわびつつ明かし暮らすほどに、四月十余日にもなりぬれば、木の下くらがりもてゆく。築土の上の草青やかなるも、人はことに目もとどめぬを、あはれとながむるほどに、近き透垣のもとに人のけはひすれば、たれならんと思ふほどに、故宮に候ひし小舎人童なりけり。あはれにものおぼゆるほどに來たれば、「和泉式部」などかひさしく見えざりつる。遠ざかる昔のなごりにも思ふを「などいはずれば、〔童〕「その事と候はでは、なれなれしきさまにやとつしましう候ふうちに、日ごろは山寺にまかり歩きてなん。いとたよりなくつれづれに思ひたまうらるれば、御代りにも見たてまつらんとてなん帥の宮に参りて候ふ」とかたる。(中略)〔童〕「しかおはしませど、〔敦道親王は〕いとけちかくおはしまして、『つねに参るや』と問はせおはしまして、『参り侍り』と申し候ひつれば、『これも参りて、いかが見給ふとて奉らせよ』とのたまはせつる」とて、橘の花を取り出でたれば「昔の人の」といはれ

(十一—十二頁)

かつて為尊親王に仕えていた小舎人童が、為尊の弟である敦道親王からの便りを届けに来る。「なかひさしく見えざりつる」と童がしばらくの間和泉式部のもとへ来ていなかったことを示すことばがあ

る一方で、「つねに参るや」という敦道親王の問いに対して、小舎人童は「参り侍り」と、和泉式部の所へいつも参上していると答えている。これは従来日記内の矛盾のひとつといわれているが、記憶違いや構想の乱れなどによるものではなく、敦道親王と和泉式部の交流の端緒をより美しく描こうとした作者の表現技巧なのではないか。為尊親王の思い出のなかに日々を送る和泉式部という設定においては、為尊親王ゆかりの小舎人童の訪れが突然であるほうが、追慕の情を強く掻き立てるし、それを読者に深く印象づけるにもはるかに効果がある。一方、そのすぐあとで小舎人童が、為尊親王亡き後も常に和泉式部のもとに出入りしていると答えているのは、敦道親王が和泉式部と交流を持つことになった最初の契機を、より自然なものにするためであろう。『和泉式部日記』において敦道親王は、「かかること〔和泉式部とのやりとり〕ゆめ人にいふな。すぎがましきやうなり」と童に口どめしたり、自分のことを「古めかしう、奥まりたる身」「かろがろしき御ありきすべき身にてもあらず」「かかるありきのつねにうひうひしうおぼゆるに」と言うなど、一貫してその好色さを否定して描かれている。和泉式部との交流も、わざわざ小舎人童を使いに行ったとするより、いつも和泉式部のところに入りしている小舎人童についてにことごとてを託したことから始まったとするほうが、好色な印象を与えずにすむ。

物語の主人公というのは、たとえば『源氏物語』の光源氏にしる薫にしる、おおむね極端な好色さを否定する方向で描かれている。限らない美質を備えながら、むやみに好色でないのが理想とされていた。『和泉式部日記』の冒頭において、明らかな齟齬を生じさせてまで、敦道親王の好色さを否定する書き方がなされているのは、敦

道親王を理想的に描こうとする意識の現れなのではないか。これはたとえば藤原道長を称揚する『栄華物語』において道長を、「ただ今御とし廿ばかりにおはするに、たはぶれにあだあだしき御心なし。」(なまぢまのよろこび)などと描くのと同じであろう。

小舎人童の行動についての記述のくいちがいは、事実を記していく日記として見ればたんなる矛盾に過ぎない。しかし、敦道親王を中心人物とした創作と見れば、哀傷の場面をより印象深くし、敦道親王を物語における主人公のごとき人物として描きだすことに効果を挙げている。敦道親王を美化し理想化するためにあえてとられた表現技巧なのであった。それは必ずしも事実にも忠実であろうとする書き方ではなく、事実とは別のところで、理想的な敦道親王像を描きだそうとする書き方である。

こうした観点からあらためて『和泉式部日記』の冒頭をふりかえって見ると、ひとつの典型ともいえる理想的な情景に仕立てられていることに気づく。和泉式部のもとを訪れることを「なれなれしきさまにやとつまじう」という小舎人童の控えめな態度も、貴人に仕える童として当時の人々の好尚にかなうものだ。また、今は亡き為尊親王を偲ぶにあたり、古歌を踏まえたやりとりによっておこなうなど、優美のかぎりが尽くされていく。ここでは為尊親王への追慕が、敦道親王と和泉式部との間に共感を呼び起こす心情として、両者の交流の発端を越え深いものとするのに重要な背景となっているが、最近の研究では、為尊親王と和泉式部の関係は従来いわれていたほど密接なものではなく、したがってこの為尊親王への追慕も、作者による設定らしいことが明らかになってきている。追慕に明け暮れるなかで始まった、世のはかなさを知るものどうしの恋

というのも、美化・理想化のための設定のひとつなのである。

このように冒頭部分では、敦道親王と和泉式部の出会いを美化・理想化しようとしている。『和泉式部日記』がこれまでいわれてきたような、敦道親王と和泉式部の愛の記録、言い換えると、和泉式部一個人にとつての思い出の記というだけの性格の作品であるならば、ここまでの理想化は必要なかったであろう。それではあえて事実と異なった書き方をして、あたかも物語の主人公のような理想化された敦道親王像を造り上げたのは、いかなる理由によるのであろうか。

三

『和泉式部日記』において和泉式部は次のように賞賛されて描かれている。

○(和泉の返歌に対して親王は)なほいふかひなくはあらずかしとおぼして、御かへり…………。(二十七頁)

○(和泉の明月を詠んだ歌に対して)宮も、いふかひなからず、つれづれの慰めにとはおぼすに…………。(三十九頁)

○(和泉の返歌が)…………とあるを御覧してもなほ(和泉を)え思ひはなつまじうおぼす。(四十三頁)

○なほくちをしくはあらずかし、いかで近くてかかるはかなしごともしはせて聞かん、とおぼし立つ。(七十頁)

一見してわかることは、賞賛はすべて敦道親王の目を通してのものであり、すべて和泉式部の和歌にかかわるものであるということだ。女性の描写において、容貌についての言及が全くなく、和歌の

才能ばかりが繰り返されるというの⁶⁾は、考えてみれば奇異なことといえる。というのは、物語の姫君、つまり主人公の恋愛の対象となる女君の場合には、和歌に堪能なのはもちろんだが、その容貌のすばらしさが語られるのが普通だからである。

このような和泉式部の描かれ方は、『和泉式部日記』においての和泉式部の位置、言い換えれば、敦道親王と和泉式部の関係を示しているといえる。和泉式部は敦道親王にとって、純粹な恋愛の対象というよりも、和歌に堪能な、風流を解する「いふかひなから」ぬ相手として描かれているのである。和泉式部を自邸に連れて来ることも、「いかで近くてかかるはかなし」といはずして聞かん」とあるように、傍において和歌や気の利いた文句を聞いてみたいということが第一にあった。敦道親王にとっての和泉式部は、風流なやりとりのできる才気あふれる歌人として大きな意味を持っていたのであった。

『和泉式部日記』のなかに、敦道親王が和泉式部に和歌の代作を依頼する場面がある。

かくてつごもりがたにぞ御文ある。日ごろのおぼつかなさなどいひて、「あやしきことなれど、日ごろものいひつる人なん遠く行くなるを、あはれといひつべからんことなん一ついはんと思ふに、それよりのたまふことのみなんさはおぼゆるを、一つのたまへ」とあり。
(五十七頁)

遠くへ行く人に贈る和歌を求めてきたのは、敦道親王が和泉式部の歌人としての力量を認めていたからにはかならない。⁷⁾『和泉式部集』や『公任集』には、敦道親王が和泉式部を伴って藤原公任の白川院を訪れた折に三者が詠み交わした和歌が残されているが、これも敦

道親王が風流な遊びの相手として和泉式部の和歌の才能を見込んでいたことを示すものといえよう。和泉式部は当時歌人としてかなり著名であったらしく、和歌の依頼が家集や史料の中にも散見する。時期的にはやや降るが、寛仁二年(一〇一八)の藤原頼通大饗の屏風和歌で藤原輔親・藤原輔尹とともに和泉式部の名前が挙げられているのは、歌人としての評判の高さを示す代表的なものであろう。⁸⁾ところで、一般には「姫君・北の方」といわれる身分の人には、和歌の依頼などしないのが普通であるから、当時の人々はもちろん、敦道親王の和泉式部認識もあくまで歌人というところにあったという点に注意すべきであろう。敦道親王と和泉式部との最大の接点は、和泉式部の和歌の才能にあったのである。

史料によれば、敦道親王は詩宴に出席したり、あるいは自ら詩宴を主催したりするなど風流な人物だったことが知られている。⁹⁾敦道親王が和泉式部の和歌の才能を買ったのは、敦道親王自身が文芸活動に対して深い関心を抱いていたからと思われる。

周知のとおり、『源氏物語』には藤原道長、『枕草子』には中宮定子という庇護者がいた。後宮に才媛を集め、その勢力を誇示することは、貴族の外戚政策として重要なことであった。後宮における文芸活動は当時の貴族にとっては必須のものだったわけである。道長は経済的な面での援助が主だったようであるが、さらに進んで自らを主人公にした作品を作らせる者もいた。『本院侍従集』は、師輔二男藤原兼通を「上達部の次郎なる人」とし、その恋愛の進行を綴った物語的家集である。守屋直吾氏は、『本院侍従集』から当代の勅撰集への入集がないこと、兼通が歌合に参加した形跡の無いことを踏まえ、『本院侍従集』は和歌の才能に劣るところのあった兼通が、

実際にも情を交わしたことがある本院侍従をして、あたかも二人の間に数多の恋愛贈答歌が詠じ交わされたごとくに虚構させ己がみやびの世界を顯示して、来たるべき権勢への一布石としたのではなかったか。

という目的で作らせたとする。その兼通の兄の藤原伊尹には、「史生くらはしのとよかげ」に自らを仮託した『一条摂政御集』がある。また、『蜻蛉日記』について山口博氏は、師輔三男藤原兼家の歌人としての能力を検証し、

物語に作られ読まれる事によって、兼家の自尊心はますます高められたに違いない。名歌人といわれた女と打打発止と歌をたかかわせてひけをとらぬ兼家。長歌には長歌をもって応ずる兼家。蜻蛉日記は歌人としてこの上ない兼家の像を作りあげたのである。権力をめぐる男の世界のヒーローであるばかりではなく、物語という女の世界のヒーローである事を兼家は実現したのである。(中略)蜻蛉日記は兼家にとってそのような自己をますます賞揚する意味であったのである。⁽¹³⁾

と『蜻蛉日記』の成立に兼家が積極的に関与しているとする。

こうして見てくると、当時の貴族がどれほど文芸活動に力を注ぎ、自らそこに参加しようとしていたかが窺える。敦道親王の場合も同様ではなかったか。すなわち敦道親王は歌人として名高かった和泉式部とかわした和歌を素材として、親王自身を主人公とする一篇を作ろうと考えたのではなかったか。ここで想起したいのは、和泉式部が当代の勅撰集である『拾遺和歌集』に入集した勅撰歌人たることだ。当時の勅撰集重視からすれば、たとえ一首とはいえ、入集によって得た和泉式部の歌人としての評判は並大抵のものではな

かったはずである。敦道親王にとってこのことはなによりも大きな魅力だったのではないか。自分を主人公とする作品を作るとなると、その相手としては風流なやりとりのできる人物が必要であるが、敦道親王にとっての和泉式部は、それにふさわしい歌人だったといえる。相手が勅撰歌人であることは、敦道親王にとっておもしろいことに違いない。さらに進めていえば、そうした歌人を相手にした風流なやりとりを記した『和泉式部日記』は、敦道親王が編ませた親王の家集としての性格を持つものだったかもしれない。いづれにせよ、文芸へ深い関心を寄せていた敦道親王が、当時の風潮に倣って『和泉式部日記』の成立に協力した可能性は充分にある。すでに述べたごとく、『和泉式部日記』の冒頭では、理想の敦道親王像を描きだそうとしていたが、全編を通じてこの調子は変わらない。

○(七夕の日)かかる折に、宮の過ごさずのたまはせしものを、げにおぼしめし忘れにけるかなと思ふほどにぞ、御文ある。見れば、ただかくぞ、(歌略)さはいへど、過ごし給はざるはと思ふもをかしうて……。(四十二頁)

○(有明けの月の晩)なほ折節はすぐしたまはずかし、げにあはれなりつる空の気色を見給ひける、と思ふにをかしうて……。(五十二頁)

折々の風流を逃すことのない敦道親王のことが繰り返し賞賛されている。また、敦道親王の容貌については、

○世の人のいへばにやあらむ、なべての御さまにはあらず、なまめかし。(十八頁)

○例のたびごとに目馴れてもあらぬ御姿にて、御直衣などのいた

う萎えたるしも、をかしよう見ゆ。(中略)前裁のをかしき中に歩かせ給ひて、「人は草葉の露なれや」などのたまふ。いとなまめかし。

(三十七)三十八頁

○宮の御さま、いとめでたし。御直衣にえならぬ御衣、出だし桂にし給へる、あらまほしう見ゆ。

(七十二頁)

○年かへりて、正月一日、院の拜礼に、殿ばら敷をつくして参り給へり。宮もおはしますを見参らすれば、いと若ううつくしげにて、多くの人にすぐれ給へり。これにつけても、我が身はづかしうおぼゆ。

(百一頁)

など並み居る貴頭のなかにあつても劣るところのない、理想的な親王として描かれている。『和泉式部日記』を見るかぎり、敦道親王は、一点の非のうちどころもない貴公子ということになる。

ところで他の資料の伝える敦道親王はどのようなものになつてゐるだらうか。『大鏡』には、次のようにある。

この春宮の御弟の宮たちは、少し軽々にぞおはしましたし。帥宮の、祭のかへさ、和泉式部の君とあひ乗らせたまひて御覽せしさまも、いと興ありきやな。御車の口の簾を中より切らせたまひて、わが御方をば高う上げさせたまひ、式部が乗りたる方をばおろして、衣ながう出させて、紅の袴に赤き色紙の物忌いとひろきつけて、土とひとしうさげられたりしかば、いかにぞ、物見よりは、それをこそ人見るめりしか。(中略)この宮たちは、御心の少し軽くおはしますこそ、一家の殿ばらうけまうさせたまはざりしかど、さるべきことの折などは、いみじうもてかしづきまうさせたまひし。

『大鏡』兼家伝 全集 二百五十七(二百五十八頁)

春宮の御弟宮たち、すなわち為尊親王と敦道親王は、いくぶん軽々しいところがあつたという。和泉式部を同車させて賀茂の祭の見物に出たことは、当時の人々の注目を集めた。『栄華物語』はつはなの巻にもこの時の記事があるが、それによれば、和泉式部を車の後に乗せた敦道親王は、見物人たちの居並ぶ棧敷の前を何度も行き来したらしい。なんとも派手ごみみの、「軽々」と噂されるのもうなずける振舞いである。

『大鏡』や『栄華物語』のこうした記述は、『和泉式部日記』に描かれた風流で優美な、物語の主人公にも劣らぬ敦道親王とはいささか異なつた印象を与える。どちらが実際の敦道親王像に近いかはともかく、『和泉式部日記』において敦道親王がここまで理想化されているのはなぜなのか。その理由は愛情による理想化というのではなく、文芸に関心を寄せていた敦道親王が、和泉式部の歌人としての才能を認め、二人のやりとりを作品にして残そうと協力していたからと見るべきではないか。『和泉式部日記』の成立に敦道親王がなんらかの形でかかわりを持ったとすれば、敦道親王を賞賛し、理想化しようとするのは、むしろ当然のことといえよう。¹⁵⁾

四

『和泉式部日記』の中に、「女」すなわち和泉式部の直接知り得ないはずのことが記されている。いわゆる超越的視点と呼ばれているものである。ひとつだけ例を挙げる。

まだ(敦道親王が)端におはしましけるに、この童かくれの方
にけしきばみけるけはひを御覽じつて、「いかに」と問はせ給

ふに、御文をさし出でたれば、御覽じて、(歌略)と書かせ給ひて、賜ふとて、「かか事、ゆめ人にいふな。すぎがましきやうなり」とて入らせ給ひぬ。(十三頁)

使いの小舎人童が、敦道親王の屋敷へ戻ってから親王と話した内容は、和泉式部の直接知ることのできないことである。ほかに、敦道親王とその乳母の会話、あるいは敦道親王と北の方の会話などが描かれている。従来の研究では、和泉式部が想像で書いたものであるとか、第三者の手になる創作の結果であるとか論じられている。

しかしながら、敦道親王の側から資料となるものが齎らされてきたと考えれば、和泉式部の知り得ない敦道親王の邸宅での動静が描かれていたとしても不思議ではない。『和泉式部日記』の成立に、文芸に関心を寄せていた敦道親王が関与・協力していたとすれば、和泉式部がこのような敦道親王近辺の出来事を知ることが、比較的容易だったであろう。

こうした資料は敦道親王自身が直接与えたものもあろうが、敦道親王邸の女房たちを通じて齎らされたものも多くあったと思われる。というのは、和泉式部はもちろん敦道親王さえ知るはずのない、敦道親王の北の方とその姉である春宮女御との間で取り交わされた手紙の内容や、北の方づきの女房たちの噂話なども『和泉式部日記』には書かれているからである。これらは漏れ聞いた話を親王邸の女房たちが伝えてきたものであろうか。

実際のところ、和泉式部は敦道親王邸の女房と少なからず交流を持っていたようである。

○同じ所の人の御もとより、御手習のありけるを見よとておこせたるに
〔和泉式部統集〕九四(一)

○南院(敦道邸)の梅の花を、人のもとより、これ見て慰めよとあるに
〔和泉式部統集〕九五(〇)

○又、程経て、おはしましし所を物の便りに見て

〔和泉式部統集〕九六(〇)

○使はせ給ひし御硯を、同じ所にて見し人の乞ひたる、やるとて

〔和泉式部統集〕九八(〇)

和泉式部の敦道親王邸入りは、『和泉式部日記』の文面によればかなりの悶着を起こしているにもかかわらず、敦道親王没後もむこうから手習や梅の花などを送ってよこすこともあったし、和泉式部自身が敦道親王邸に出向く機会もあるなど、交流は浅からずあった。おそらく敦道親王の生前から同様な交流があったと見てさしつかえあるまい。

総じて女房同志の交流は活発であつたらしい。そして随分隠し立てのない交流もおこなわれていたようだ。『紫式部日記』には、「齋院に、中將の君といふ人侍るなり。聞き侍るたよりありて、人のもとに書きかはしたる文を、みそかに人とりて見せ侍りし。」と、直接面識のない者どうしの手紙さえ見せあうことがあつたとある。よその家の動向にも精通していたであろうことは想像に難くない。『和泉式部日記』の場合も、敦道親王邸の女房たちとの交流によって齎らされたものをもとにして描かれたことが少なからずあつたと思われる。

敦道親王の北の方と和泉式部の関係は、『和泉式部日記』によるとなかなか険悪なものになっている。敦道親王が和泉式部を呼び寄せたことについて、北の方は露骨な不平を述べたて、その姉である春宮女御は北の方に同情する。これは事の成り行きからして当然のこと

とといえる。

北の方の御姉、春宮の女御にて候ひ給ふ、里にもし給ふほどにて、御文あり。「いかにぞ。このごろ人のいふことはまことか。我さへ人げなくなんおぼゆる。夜のまにもわたらせ給へかし」とあるを……………。(百丁百三頁)

一見すると春宮女御は和泉式部の敦道親王邸入りに関してひどく憤慨しており、北の方に対して深い同情を寄せているようであって、敦道親王をめぐる北の方と和泉式部のぬきさしならない対立が背景にあるように見える。ところが次に掲げる『栄華物語』と較べてみると、意外にもここは北の方に対して好意的な描き方がなされていることがわかる。²⁰⁾

年月に添へて(敦道親王は北の方への)御心ざし浅うなりもて行きて、和泉守みちさだがめをおぼし騒ぎて、この君(北の方)をば事の外におぼしたりしかば、居煩ひて、小一条のおぼ北の方(祖母)の御許に帰り給にしぞかし。されば東宮も、宣耀殿も、「この事を我口入れたらましおぼいかにききにくからまし。知らぬ事なれば、心やすし」とぞおぼし宣はせける。

『栄華物語』はつはな 大系上 一(百九十三頁)

『栄華物語』では、和泉式部との一件に対して、姉である春宮女御(宣耀殿)は突き放したような冷淡な対心をしていて、『和泉式部日記』に見られるような北の方への同情がない。もし『和泉式部日記』に記されているごとく、実際も北の方と和泉式部の関係が険悪なものであり、また『和泉式部日記』が和泉式部の敦道親王を偲ぶ個人的な思い出を綴った著作だとすれば、このように好意的な筆致をもってする必要はないだろう。『栄華物語』に較べると『和泉式部日

記』において北の方が好意的に描かれている理由を求めるとすれば、敦道親王の協力があつたためになされた北の方への配慮ということになるのではないか。敦道親王の協力のもと一女房の手に成つた作品だとすれば、その後敦道親王のもとを去つたとはいへ、その北の方を悪しざまに描くことは当然憚られるであろう。

これまで見てきたように、敦道親王が『和泉式部日記』の成立にかかわっていたとすると、『和泉式部日記』の末尾に付された一文のもつ意味も明らかになってくる。

宮の上御文書き、女御どのの御ことは、さしもあらじ、書きなしなめり、と本に。(百五頁)

作者の弁解めいたこの辞は、この作品が公開を前提として書かれたことを示しているのではないか。²¹⁾『源氏物語』夕顔の巻の末尾や、『讃岐典侍日記』にも同様の辞がある。前者を例にとると、

かやうのくだくだしきことは、あながちにかくろへ忍び給ひしもいとほしくて、みなもらしとどめたるを、「など帝の皇子ならんからに、見ん人さへかたほならず物ほめがちなる」と作り事めきてとりなす人のし給ひければなん。あまりもの言ひさがないき罪さりどころなく。(夕顔 全集一―三百六十九頁)

と、やはり高貴なあたりへの配慮を怠らない書き方をしている。高貴な人物の身の上を語り、それを公開する場合には、礼を失さないようこうした表現技巧がとられたのである。

したがって、もし『和泉式部日記』が、和泉式部の個人的な敦道親王追慕のために書かれたのであれば、先に掲げた一文は必要なかったということになる。もとより他人に読ませるためのものではないのだし、かりに読者がいたとしてもごく限られた親しい人たち

に違いないから、そうした弁解の辞はいらないはずだ。この弁解めいた一文は、敦道親王や北の方のことを書くにあたっての配慮なのである。そしてそれは、『和泉式部日記』の成立に敦道親王がかかわり、敦道親王をはじめその周辺の人々が作品の読者圏に含まれることを意味しているのではなからうか。

五

敦道親王の要請・協力のもとで『和泉式部日記』が成立したのではないかということを検討してきたが、これには不都合な点もないわけではない。敦道親王と和泉式部の関係が始まった長保五年（一〇〇三）四月から、寛弘元年（一〇〇四）一月の『和泉式部日記』の記事の終わりを経て寛弘四年（一〇〇七）十月の親王没までがあまり期日がないことである。しかし『和泉式部日記』を執筆するのに不可能というほどの短期間でもない。有名な歌人だった和泉式部とのやりとりを、自らの文芸活動の一環として記す価値ありと判断した敦道親王が、資料的な面、経済的な面での協力を行った可能性は充分にある。そうした協力が行われたために、和泉式部の知ることのできない敦道親王周辺の記事が含まれていたり、敦道親王を理想化した描写がなされていたりすると考えられる。

『和泉式部日記』成立の背景を考えるにあたっては、成立時期の問題、自作か他作かの問題が密接にかかわってくるが、いずれにしても従来は、敦道親王への愛情・追慕といった和泉式部の内面にのみ焦点があてられていた。思うにこれは、和泉式部を「奔放な生き方と情熱的な和歌とによって知られる女流歌人」（全集解説）などと

する見方が定着しているからであろう²²。ところで、このような通説を築き上げるのにあずかるところ大であったのが、藤原道長が和泉式部を「うかれめ」と呼んだという逸話であろう。

ある人の扇をとりてもたまへりけるを御覧じて、大殿（道長）たがぞと問はせ給ひければ、それがときこえ給ひければ、取りて、うかれめの扇と書きつけさせ給へるかたはらに、（歌略）

（『和泉式部集』二二二〇）

はたしてこの「うかれめ」という道長のことばを顔面どおり受け取ってよいものなのか。戯れ言をいって相手をからかうのに、本当のことを口にして貶めることはあるまい。それでは冗談にならないではないか²³。

この逸話を取り上げたのは、和泉式部の性格を論ずるためではない。同じような逸話が、道長と紫式部の間にも遺されているのと比較するためである。

源氏の物語、御前にあるを、殿の御覧じて、例のすずることども出できたるついでに、梅の下に敷かれたる紙にかかせ給へるすきものと名にしたてれば見る人の折らで過ぐるはあらじとぞ思ふ（『紫式部日記』寛弘六年）

こちらのほうは、「実際に式部が好色者の評判であったからというのでなく、物語で恋愛の種々相をみごとに描いてみせた彼女を、その道に精通した女性と見立ててのもの」と解すべきであろう。（全集頭注）というように、道長が『源氏物語』を読んだうえでの冗談だとされる。和泉式部の場合にしたように、これをふまえて紫式部のことを「すきもの」と考える人は、どういふわけかほとんどない。紫式部の場合は道長の冗談とみなし、和泉式部の場合は顔面どおり

に受け取らなければならぬという、両者に区別を設ける根拠はどこにあるのか。実際には、受け取り方に差をつけなければならぬほど、二人の生活に差はなかったであろう。女房として宮仕えを続けていることからすると、少なくとも和泉式部も当時の社会通念の許す範囲内であったはずである。

あえて大胆な仮説を述べれば、道長が和泉式部を「うかれめ」と呼んだのは、『和泉式部日記』を読んでいだからではなかったか。道長と敦道親王は少なからず交際があったし、敦道親王没後、和泉式部は中宮彰子のもとに出仕したから、道長が成立後間もない『和泉式部日記』を目にしていたことは充分考えられる。極端な言い方をすれば、『和泉式部日記』の成立に道長が絡んでいたことさえ、ありえない話ではない。

道長の名まで出すのは憶測にすぎないが、いずれにしても『和泉式部日記』成立の背景には、和泉式部個人の内的な執筆動機ばかりでなく、外部からの要請・協力があつたのではないか。成立にあつた敦道親王側から協力が行なわれた可能性は高い。敦道親王側の資料によって書かれたと考えるのが自然な部分がかなり認められること、敦道親王を徹底して理想化して描いていること、北の方周辺への配慮を怠っていないことなどは、敦道親王側から協力があつたことの反映であろう。そのような協力がなされたのは、当時の貴顕たちの文芸好尚の風潮のなかで、才気あふれる歌人和泉式部との風流なやりとりが、書き留める価値ありと判断されたからにはかならない。当時の貴顕たちの協力・庇護のもとに成立したのは、はたして『枕草子』や『源氏物語』だけだったのか。先にもふれたように『蜻蛉日記』や『本院侍従集』などもそうであったという。とす

るならば、『和泉式部日記』の場合にも、そのような成立の背景が存在する可能性を検討してみる必要は、充分あるのではなからうか。

注

(1) 『蜻蛉日記』の本文引用は桂宮本による。句読点を施し、一部本文を改めたところがある。

(2) 本稿での本文引用は、『和泉式部日記』は岩波文庫(昭和五十六年改訂版)、『和泉式部集・和泉式部統集』は岩波文庫(昭和五十八年)により、それぞれ頁・歌番号を示した。一部表記を改めたところがある。

(3) 小町谷照彦「和泉式部日記の方法——その虚構性を通して——」(『国文学』昭和四十四年五月)。山田茂子「和泉式部日記」における叙述上の問題点についての一試論(『学習院大学国語国文学会誌』十四 昭和四十六年三月)。木村正中「和泉式部日記形成論——その冒頭をめぐって——」(『源氏物語と女流日記 研究と資料』昭和五十一年 武蔵野書院)。

(4) 藤岡忠美「家集からみた和泉式部——『和泉式部日記』まで——」(『鑑賞日本古典文学 王朝日記』昭和五十年 角川書店)。「評伝・和泉式部」(『解釈と鑑賞』昭和五十一年一月)。「和泉式部伝の修正——為尊親王をめぐって——」(『文学』昭和五十二年十一月)。「和泉式部集」(『賞書——為尊親王挽歌を探る——』(『国語と国文学』昭和五十二年十一月)。
これに対する反論に、伊藤博「和泉式部——ゆかりの恋——」(リポート 笠間) 二十三 昭和五十七年)、森田兼吉「和泉式部日記と為尊親王」(『日本文学研究』十五 昭和五十四年十一月) など。

(5) この日記の成立は、敦道親王の死と、親王へ対する愛情とに関係がある。(中略)ここに式部が、二人の愛の交渉の経過を、思い出の記念塔として物語化しよう、との構想をうち立てたのではないか、とわたしは考える。(『遠藤嘉基 大系』『和泉式部日記』解説 昭和三十二年)。「和泉式部が帥宮との宿命的な恋を回想し、わが身の上を記すことによって

自らをなぐさめ、人にもこの奇しき宿世と恋のまことを読んで貰いたいと思つたのではないか」(大橋清秀『和泉式部日記の研究』昭和三十六年初音書房)。「ほかならぬ己れひとりのための、止むに止めぬ宮爲として成されたとみられる和泉式部日記」(宮崎荘平『和泉式部日記の作品形成』藤女子大國文学雑誌、十九 昭和五十二年四月)。結局は、書く人みずからの精神的な救い、いいかえれば自己浄化のため(鈴木一雄『全講和泉式部日記』昭和五十八年 至文堂)。「和泉式部日記」は、このようにして、式部の魂の必然の要請から形象化されたものと思われる。」(清水文雄 岩波文庫解説)。

(6) このことについて沢田保彦「和泉式部日記にえがかれた人物像について」その作者と著作動機を中心に」(平安文学研究 第二十五輯 昭和三十五年十一月)は、「つまり作者は和泉式部であり、彼女が書いたからこそ、自分の容姿・容貌を殊更書く必要はなかったのだ」とする。

(7) 吉田幸一『和泉式部研究一』(昭和三十九年 古典文庫)は「自分(宮)に『別の女』があつたとしたら、女(和泉式部)はどう思ふだらうか。ついでに代詠の力量も試してみよう、といふ魂胆ではなかつたであらうか」とする。森田兼吉「和泉式部の代作歌」(『日本文学研究』十六号 昭和五十五年十一月)では、敦道親王が「和泉に自己と深いかわりのある女の影を見せつけるため」「嫉妬させようとした」ための依頼であるとする。阿部俊子「鑑賞日本の古典 和泉式部日記」(昭和五十五年 尚学図書)は「親しく、しかもこのような歌の名手として女をよなき人と認めているので」依頼したと推測する。鈴木一雄『全講和泉式部日記』(前掲)は「宮が式部に誇示するために意識して書いたか、神経を使わない貴人らしいおおらかさで書いたものか、そのあたりのところは何もわからな

い」とする。

(8) 岩波文庫『和泉式部集』九九―一〇七番。新編国歌大観『公任集』二九―三六番。

(9) 後藤祥子「和泉式部は同時代に歌人としてどう評価されたか」(『国文学』昭和五十九年十一月)。

(10) 『御堂関白記』寛仁二年二月二十一日の条。この時の記述は『小右記』・『栄華物語』ゆふしでの巻にもある。

(11) 大橋清秀「和泉式部——帥宮敦道親王との恋」(『国文学』昭和三十三年一月)。清水文雄「和泉式部」(『日本歌人講座』二 昭和四十八年五月)。森田兼吉「敦道親王の結婚」(『中古文学』十一 昭和四十八年五月)。後藤昭雄「敦道親王」(『平安朝漢文学論考』昭和五十六年 桜楓社)。福井迪子「大江嘉言考」(『一条朝文壇の研究』昭和六十二年 桜楓社)。

(12) 守屋省吾「歌人藤原兼通の実像と虚像」(『平安文学研究』第五十輯 昭和四十八年七月)。中嶋真理子「本院侍従集」考——所謂「本院侍従集」は藤原兼通の私小説的歌物語「本院侍従」ではなかったか——は「本作品は、兼通が自身の手でか、或いは側近の者に命じて編纂させたとする可能性が充分にありうるのではないだろうか」とする。

(13) 山口博「歌人兼家と蜻蛉日記」(『王朝歌壇の研究 村上・冷泉・円融朝篇』昭和四十二年 桜楓社)。水野隆「蜻蛉日記上巻の成立過程に関する試論」(『論叢王朝文学』昭和五十三年 笠間書院)でも兼家の側からの執筆奨励を説く。

(14) このことは「和泉式部日記」の成立時期とも絡んでくるが、「拾遺和歌集」の成立は寛弘二年(一〇〇五)六月から寛弘四年一月の間といわれている(岩波書店『日本古典文学大辞典』)ので、敦道親王(寛弘四年十月没)が和泉式部の和歌の勅撰集入集を存知していた可能性は高い。

(15) 宮崎荘平「女房日記の形成とその展開」(藤女子大國文学雑誌) 十四 昭和四十八年十月)では、こうした賞賛を主人の下令という執筆事情に求め、女房日記や歌合日記に共通する性格とし、『紫式部日記』『枕草子』をその延長線上にみる。ただし『蜻蛉日記』『和泉式部日記』については「女性の表出意欲そのもの」が作目形成の根底にあるとし、女房日記とは別の流れに立つものとして主人賞賛を認めていない。

(16) 鈴木一雄『全講和泉式部日記』(前掲)。
(17) 鈴木知太郎 古典文庫『和泉式部日記』解説(昭和二十三年)。織田裕

子「和泉式部日記」の作者について」(『国語国文』昭和三十三年四月)。
上坂信男「和泉式部日記をめぐる一つの覚書」(『平安文学研究』第三十二輯 昭和三十九年六月)。

(18) 今井卓爾『平安朝日記の研究』(昭和十年 啓文社)。

(19) 吉田幸一『和泉式部研究一』(前掲)は敦道親王没後のこうしたやりとりの際に「和泉との恋愛時代の、宮の側から見た和泉のことや、また宮の側の事情なども書いた資料が齎らされた可能性を示唆している。

(20) 『和泉式部日記』と『栄華物語』の描写態度の差について、吉田幸一『和泉式部研究一』(前掲)では『和泉式部日記』のほうを実像とし、敦道親王を知悉する人が書いた結果とする。大倉比呂志『和泉式部日記』巻末注記に関する「覚書」(『平安文学研究』第四十八輯 昭和四十七年八月)はその原因は北の方へのうしろめたさを感じた和泉式部が北の方の立場を理解し考慮したためとする。藤岡忠美「和泉式部日記の前提的基層と創作性について」(『国語と国文学』昭和六十二年十一月)は『大鏡』も北の方に非好意的とする。

(21) 尾崎知光「和泉式部日記考注」(昭和二十九年 文京書院)は「式部自身」が日記を物語風に創作したり、又自分の行為に対する気兼ねから事実をばかしたりする為の技巧とする。宮崎莊平「和泉式部日記作者論の可能性」(『国文学』昭和五十三年七月)は、和歌の叙述から散文叙述への転換による「作者自身が筆をすすめつつ次第に違和感をおぼえるようになったにちがいない叙述の仕方と内容についての弁明」とする。鈴木一雄「全講和泉式部日記」(前掲)も叙述の転換(超越的視点の拡大)によって書き続けることが困難になったために付された一文とする。藤岡忠美「和泉式部日記の前提的基層と創作性について」(前掲)は「済時の一族や女御城子にたいする憚りの気持ち」があると述べている。

(22) 「奔放な恋愛歌人」といった見解は与謝野鉄幹・晶子『和泉式部全集』以来脈々と続いているものと思われるが、野村精一『和泉式部日記・和泉式部集』解説(昭和五十八年 新潮古典集成)では極端にロマン的な読みへの傾斜に対して懸念を表明している。

(23) 「うかれめ」という呼称に対して懸念を示す論は少ない。管見の範囲では、篠塚純子「和泉式部「うかれめ」の内と外」(『国文学』昭和五十六年四月)が、「その道長の言動には和泉への非難も侮蔑も含まれてはいないと解すべきであろうし、また、この詞書から直ちに和泉が「うかれめ」と当時の人々に呼ばれていたなどと判断することもできないだろう。」とする。